

Student Intern Workshop Report 2018

インターン・ワークショップ・レポート

この冊子は石塚計画デザイン事務所のインターン生が作成したレポートをまとめたものです

子どもたちと考える未来のたまプラーザ

わたしの住みたい粘土のまち“青空が丘のくもプラーザ”ワークショップ

子どもたちが想い描く未来のたまプラーザ

横浜市青葉区のたまプラーザにある「PEOPLEWISE CAFE」。ここで、たまプラーザに住む1〜3年生の子どもたちに“自分たちが住みたい未来のたまプラーザ”を想い描いてもらいました。この日行ったのは、粘土でつくる「わたしの住みたい粘土のまち“青空が丘のくもプラーザ”」ワークショップです。

まずは子どもたちが一人ずつ自己紹介をして緊張をほぐし、くもプラーザの紙芝居を見てもらいました。くもプラーザのイメージがついたところで、より具体的に想い描いてもらうために、どんな人が住んでいるのか考えます。そしていよいよ、粘土で形づくり。「PEOPLEWISE CAFE」にあるまちの模型を5つのブロックに分けて一人1ブロックずつ担当し、それぞれが粘土で住みたいまちをつくっていききました。最後は一人ひとりが自分のつくったまちをみんなに発表して、それぞれの作品を合体させて“青空が丘のくもプラーザ”の完成です。

一人よりも、みんなでやるほうが楽しい

参加者が少ないこともあり、最初は「時間内に終わるかな」と心配していたのですが、いざはじまると子どもたちの手は止まりません。まわりで見守っていたお父さん、お母さん、そし

て私たちスタッフも入り混じってわいわいと盛り上がり、あっという間に時間が過ぎていきました。白い粘土でくもを表現したまちはどんどんにぎやかになっていき、個性あふれる素敵な“くもプラーザ”のまちができました。親子で「何つくってるの?」「美術館だよ」というような会話を交わしたり、協力してつくったりしている様子は微笑ましかったです。

また、頭で考えているだけよりも手を動かすことで、まちを考えることがもっと楽しくなります。他の人が持っている材料を使ってみたり、つくっているのを見てマネしてみたり、1人では思いつかなかったものが生み出されるのもワークショップの面白さだと実感しました。

子どもたちの感性がミライのまちを教えてくれた

普段、自分たちの暮らしを振り返る機会はなかなかないと思います。今回のワークショップをきっかけに、子どもたちが自分たちの住むまちのことを見直して、より良くしたいと考えるようになってくれたら嬉しいです。まちのことを考えることが楽しくできれば、自分たちの住むまちのことをもっと好きになってくれるのではないのでしょうか。未来のたまプラーザがどんな風になっているのか、楽しみです！（椿崎）



手づくりの楽しさは人を繋ぐ

たまプラーザ桜まつり 缶バッジづくりコーナー

快晴の空と満開の桜、たまプラーザの桜まつり

お天気に恵まれ、今年で第9回目を迎えた「たまプラーザ桜まつり」。開催場所は横浜市青葉区のみしが丘公園で、私が予想していた以上に大規模なお祭りでした。広々とした公園内では様々なブースがあり、ステージ上では地域の方々のパフォーマンスが行われ、公園の周囲にも小さなフリーマーケットのブースがずらりと並んでいて、とても賑やかな雰囲気でした。この日は、「次世代郊外まちづくり」という、大都市郊外部におけるまちの課題に対して、新しい試みを実験的にを行い、次世代につなぐまちづくりをしているプロジェクトのPR活動として、缶バッジづくりのお手伝いをさせていただきました。

大盛況!! 手づくりの楽しさは世代を超える

缶バッジづくりは多くの方に参加していただきました。当日一緒にバイトしていた子に話を聞くと、

「昔、家で缶バッジづくりできるおもちゃがあって、その時は、付属の台紙でつったり、広告紙にあった写真を切ってついたりして、結構楽しかった思い出だよ。」

と缶バッジづくりが流行っていた時期もあったそうです。今、子どもたちの生活環境は、電子機器に囲まれた、デジタル社会が一般的で、自分の手でつくる、アナログ的なものには関心が

ないかなと思いましたが、缶バッジづくりがはじまると、イベントの最後まで、列がほぼ一度も途切れませんでした。また、子どもはもちろん、大人の方も目をきらきらと輝かせて、興味津々に見てくれました。

缶バッジづくりでは、子どもや高齢者、車やバスのイラストなど、様々な絵柄が描かれ、どれもかわいくて色鮮やかでした。後で話を聞くと、実は、たまプラーザで行われた地域のイベントや取り組みに関する内容で、缶バッジを切り口にして、参加者が日常的に身につけることにより、まちづくりに日頃から関心をもってもらうきっかけづくりだったことが分かりました。

小さなきっかけから、人々と共に歩むまちへ

缶バッジづくりに来てくれたのは主に子連れの家族で、様々な家族のあり方を発見しました。そばに立ち、子どもがつくるのを静かに見守る親や、絵柄選びから、子どもと一緒に作業をする親もいました。弟や妹を優しくフォローし、仲良く作業していた兄弟たちもいて、缶バッジづくりを通して、家族が協力し合い、完成品を持って和気藹々と帰っていくのを見ると、まちづくりのPR活動として行われた缶バッジづくりという小さな活動が、まち全体がこれからよりよくなっていくきっかけになるだけでなく、そのまちに住んでいる一つ一つの家族の関係を築いていく効果もあるのではないかと思います。（卓）



●インターンレポーター：慶應義塾大学大学院 メディアデザイン研究科 修士2年 卓 映萱

●開催日時：2018年3月31日 ●実施場所：みしが丘公園 ●参加者：地域住民、地域団体の方々

みんなの思い込めて 目指せ！新たなシンボル

第4回 | 西武新宿駅前通り沿道まちづくり検討会

それぞれが思い描くまち、どう変わるか

今回、私は西武新宿駅前通り第4回検討会、中間まとめの回に参加しました。これまで話し合ってきた街路樹・街路灯・横断防止柵の配置を決めるのが目的です。ただ、ここには沿道の地権者、企業、地域組織の方々、様々な背景を持つ方々がいます。それぞれ、まちへの思いがあり、各立場での意見が存在しています。例えば、対象となる駅前通りは日本一の歓楽街、「歌舞伎町」に位置し、海外からも大勢の観光客が訪れる場所です。このような商業エリアがより繁盛するよう、今より清潔で煌びやかで賑やかな街並みにしていく意見があります。一方で、過去の面影を残したい思いで、レンガと緑あふれる街並みにする意見もあります。このように、様々な考えがあったとしても、両者ともまちへの愛着からなので、簡単に切り捨てるわけにはいきません。そこで、各チームのファシリテーターが、個々の思いを掘り下げ、全体的な利益からも分析し、みんなが納得するような結論を参加者と一緒に考えます。

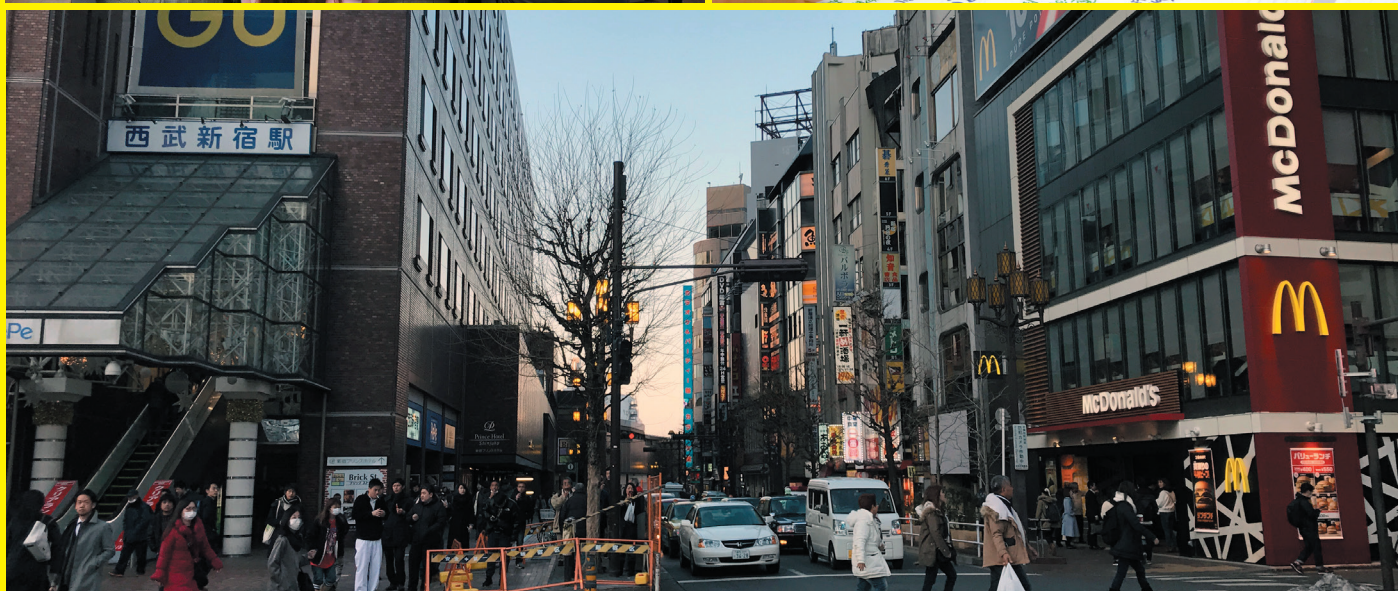
まちのために木を切る！？

対象の敷地周辺には歌舞伎町一番街や TOHO シネマズ、多くの飲食店等があり、いつも若者や観光客で賑わっています。しかし、さらに駅前通りを北へ進むと、徐々に人影が少なくなります。人の流れが少ないうえ、レンガ造りの街並みが少し暗く、

街路灯も街路樹により遮断され、昼間ですが薄暗いイメージを抱くかもしれません。この沿道まちづくりをきっかけに、参加者の皆さんは意外な決断をされました。それは、街路樹が茂みを持つことで逆に暗くなってしまったため、適度な本数に減らすことにしたのです。また、より明るいイメージをつくるため、道路の舗装を白など明るい色にする意見がでました。それに対し、将来の維持を考え、明るい色は汚れが目立ちやすく、キレイなまちの維持にコストが高くなる声もありました。全体のイメージづくりは壁や床のタイル一つでも、全く違う雰囲気になります。現実的な部分も真剣に見直さないと問題が生じ、環境が維持できなくなり、寂しいまちになってしまうかもしれません。理想と現実の溝を埋めることは大事ですね。

積み重ねた議論で築いたステキな暮らし

当日、会場では検討している沿道の模型が展示され、その模型を見ながら考える方もいれば、模型を使って自分の思いを語る方もいました。そんな参加者の皆さんを側から見て、もしかしたら、今まで私が通ってきた道にあるものは、当たり前に見えるように見えるが、実は、多くの人が議論を重ねて、決めてきたのかとも思い、感心しました。まちづくりは一時的なものではないため、じっくり考え、しっかり議論して、地域に関わる人々の努力でやがてできあがったまちは、一生の宝物です。（卓）



「つくって終わり」にしない！まちの使い方まで考える

第6回 | 西武新宿駅前通り沿道まちづくり検討会

地域の人の想いを受け止めた道のデザイン

西武新宿駅周辺の再開発に合わせて、沿道を歌舞伎町の玄関口としてより魅力的に整備するための検討会。全8回のうち第6回目となる今回は、これまでのワークショップでの協議内容を踏まえたデザインチームからの提案と、それに対する対話が主な目的でした。これまで、まちの皆さんと議論を重ね、想いを積み上げてきた成果がどのようなカタチになっているのか、会の開始を待つまちの皆さんの表情は、期待しつつも、一方で少し不安な気持ちもあるように見えました。ところが、会のはじめに行われたデザインチームの提案は、まちへの想いをしっかりと受け止めた素晴らしいものでした。まちの未来が描かれたパースからは、受け継いできた伝統を守りつつ、時代の変化に対応する、新しい西武新宿駅前通りのイメージが湧きました。また、まちを象徴するような商店街灯やモニュメントに加え、街路樹や横断防止柵など細かな点についての具体的な提案も印象的でした。

みんなで考えるまちの使い方

会の後半は、各グループに別れてどんな印象を受けたか話し合いました。6回目ということもあって、権利関係や許可の面から見て実現できる可能性はあるのか、もしダメだったときの代替案はどうするべきか、より具体的な意見もあがりました。

中でも印象に残ったのは、実施後のまちの使い方です。舗装を明るくした分汚れが目立ってしまうのではないかと、荷捌きのルールを決めないと渋滞につながってしまうのではないかと、など実際の使われ方を想像した上での課題が多く出ました。このような意見が出るのは、普段からまちを見ているからこそだと思います。

将来のまちのために

3グループの成果を発表して意見を共有した後、まとめを行いました。まちの課題の解決策を考える中で、どのようにまちを使うべきか、維持管理の仕方についても議論が進みました。沿道整備が終わった後も、訪れる人やお店を営む人にとっても心地よいまちの環境を維持していくには、まち全体でのルールづくりが重要だと思います。あと2回で、ワークショップは一区切りですが、沿道整備が終わるのはしばらく後です。このような場を設けることで、今から将来のまちのことを考え、まちの皆さんが主体的にまちづくりに関わっていく体制をつくっていく必要があることを改めて実感できたワークショップでした。ワークショップ終了後は、会場から西武新宿駅方面が良く見えたため、全員で窓を眺めながら、まちの未来について想いを語りあいました。このような小さな体験がまちへ関わるキッカケになることを祈っています。（甲田）



ものづくり体験は夏まつりの忘れられない思い出と共に

さんかく BASE 夏まつり 缶バッジ・とうろうづくりコーナー

夏祭りでものづくり体験のお手伝い

約8万人もの老若男女が夏の憩いを求めて訪れ、浴衣姿の来場者も目立った「第35回たまプラーザ夏まつり」。同日に、次世代郊外まちづくり活動の拠点である「WISE Living Lab さんかく BASE」では、「さんかく BASE 夏まつり」を開催。ゆかたの着付け・撮影イベントや打ち水などを実施し、私は、「缶バッジ・とうろうづくりコーナー」にスタッフとして参加し、子どもたちを中心に、参加者にもものづくりを体験してもらいました。

それぞれの愛着が見える個性豊かな作品たち

担当したコーナーでは、こだわりや好みに合わせて、絵柄入り・塗り絵型・オリジナルの3種類の台紙から自由を選ぶことができます。特に、低学年くらいまでの子には塗り絵型の台紙が人気でした。イラストのモチーフは、たまプラーザのまちなかにある建物や公園、乗り物など。中でもロケット型の遊具がある公園のイラストや、かわいい動物入りのイラストが人気を集めていました。また、中学生以上はオリジナルをつくる台紙を選ぶことが多く、受験に向けて家族で合格祈願のキーホルダーをつくる姿もありました。参加者の方たちが綺麗にできあがった完成品を見て、歓声を上げて嬉しそうにする様子に、私も暑さを忘れて一緒に楽しみました。

子どもたちの目線で、夏の思い出を追体験

「とうろうづくり体験」では、子どもたちがイラストを描き、つなぎ合わせた和紙を、竹串や輪ゴムなどを使い、三角形のタワー状に組み立てました。花火大会や海水浴など夏休みの体験を絵にする子が多く、子どもの目線から見た瑞々しい夏の思い出を、私も追体験しているかのようでした。また、完成品と一緒に記念撮影をしたり、描いた絵を見ながら会話を弾ませる親子の姿に、活発なコミュニケーションが生まれていると感じました。街路に灯ったとうろうの姿が、地域の人たちが行き交う街路を明るく、安全にという願いがこめられているようにも見え、このまちの明るい未来も照らし出しているかのようでした。

子どもたちの「顔」が見えるものづくり体験

最盛期はスペースからあふれるほど賑わった「缶バッジ・キーホルダーづくり体験」では、用意された道具を譲り合いながら、オリジナルグッズをつくらうと参加者が目を輝かせて取り組んでいる姿が印象的でした。また、「とうろうづくりコーナー」では、終始和気あいあいとしながらも、一人ひとりがゆったりとした時間を過ごしているようでした。自分がつくったものを通じて、経験したことや、住んでいるまちについて知る可能性を秘めているものづくり体験。イベントを通し、このまちに住む人たちの「顔」が見えたような気がします。(堀越)



アバターづくりでまちづくり!? みんなで描く未来の渋谷

渋谷の未来を描くワークショップ | 代官山・恵比寿・広尾周辺エリア

ちがいをちからに変える街、渋谷

都市計画と区独自のまちづくりを組み合わせた「渋谷区まちづくりマスタープラン」。渋谷区に関わる人々の想いを集め、マスタープランに反映させるためのワークショップに参加しました。渋谷区内5つのエリアで行われ、今回は代官山・恵比寿・広尾周辺エリア。参加者のメインは30～40代。60歳以下の幅広い世代が集まりました。オープニングトークでは、「未来志向」「自分ごと」「ちがいをちからに」の3つのキーワードが強調されました。また、渋谷区からは『あなたの知識も、経験も。あなたと誰かの「ちがい」はすべて、この街のちからになります。YOU MAKE SHIBUYA。』という力強いメッセージが送られました。

未来の渋谷に住むアバターづくり

今回のワークショップでは、未来の渋谷に住むアバターを通してまちづくりを考えました。はじめはアバターづくりに戸惑い、あまり手の動いていなかった参加者も、ペアで議論を重ねるうちに渋谷への想いに話が盛り上がり、アバターを発表する頃には、目をきらきらさせながら話していました。例えば、30代の女性と50代の男性の新しい物好き2人が発表したアバターは、セグウェイに乗りゴーグルを着けたカラフルな猫「ジェイ

ニー」。猫の目で表通りだけではない街の魅力を発見したい、セグウェイに乗り、好きな服を着て自分の個性に正直でありたい、そんな想いが込められているそうです。普段の職業・年齢・性別など自分の属性をアバターに置き換えることで、広い視野からまちを見て、より身近に未来のまちを考えられるようです。

渋谷の未来を描く

ワークショップの後半では、個性豊かなアバターが楽しく共創できる未来の渋谷を描いていきました。グループごとに討論が行われ、テーマは、都市生活、防災、文化からビジネスまで多岐にわたります。例えば、通信技術の発達で「すべての問題を1分以内に解決できる街」、渋谷らしさを活かした「アート、音楽、ファッション『特区』で発表・表現できる街」などの案が生まれました。どの意見もクリエイティブで、個々人の知識やバックグラウンドが生かされ、まさに「ちがいをちからに」新しい渋谷の未来像が多様に描かれているようでした。今回のワークショップのように、身の回りにある課題・不満ではなく、起こりうる社会変化や技術革新を柔軟に想定することで、より自由な未来志向の都市像を発想することができるのではないでしょうか。今回の成果は一旦取りまとめられ、渋谷区民に共有されるそうです。今回のワークショップが、渋谷の未来像の実現に向けた大きな一歩になることを、私自身も祈っています。（久保）



●インターンレポーター：東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻 修士1年 久保 夏樹

●開催日時：2018年8月5日 ●実施場所：地域交流センター新橋 ●参加者：代官山・恵比寿・広尾周辺で暮らす人、働く人、関係している人

どうなる？ミライのカワサキ公共施設「中原太郎さん(仮)」の30年後とは？ カワサキ公共施設のミライを考えるアイデアワークショップ

未来を担う世代が参加

市民が利用しやすい未来の公共施設について考える「カワサキ公共施設のミライを考えるアイデアワークショップ」。参加者は、20～40代を中心とした、まさにこれからの川崎を担う世代。中には、川崎にキャンパスがあるという学生さんの姿もあり、活気にあふれた時間となりました。これからの社会状況をもとに公共施設の現状と市民のニーズを学び、「カワサキ公共施設ミライ研究所」の一員となったつもりで、ともに30年後の公共施設の活用方法を考えました。

ペルソナから導くカワサキのミライ

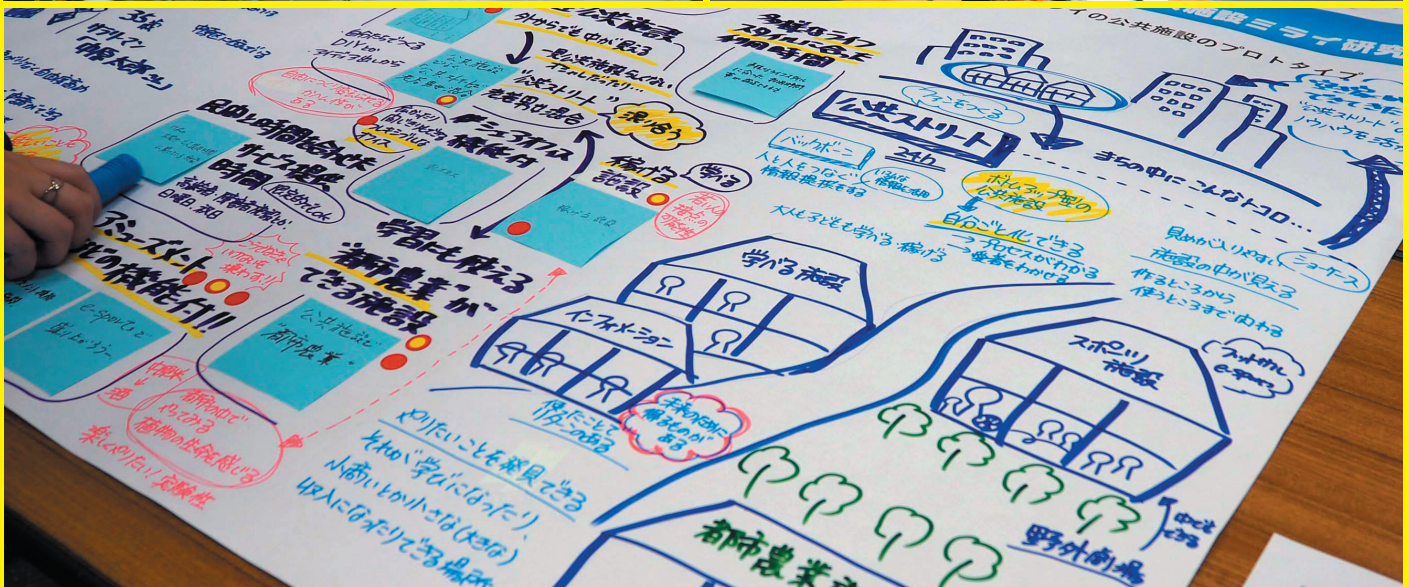
まず、どんな人に公共施設を使ってほしいのかを考えるために、ペルソナを設定。あるチームに参加していた5歳のお子さんの30年後を考えようということになりました。ペルソナの名は、中原太郎さん(35歳)。中原区に住むサラリーマンで、夫婦共働き、子どもが2人。会社や自宅、コワーキングスペースで仕事をしています。趣味はeスポーツとフットサル。2018年の“今”らしい設定ですね。このように、できるだけ具体的な設定をして、「この人なら公共施設にこんなニーズがありそうだね」、「こんな施設があったらいいよね」と、ソフト面からハード面に落としこんでいけるよう、意見を出し合いました。

未来志向型ワークショップ

今回は、「こんなものが合ったら良いよね」と、アイデアベースで具体化していく未来志向型のワークショップ。30年後には、ITやAIの発展により、医療や介護、買い物など時間軸からモノの流通まで日常生活がガラッと変わっていたり、いろいろなものをシェアする時代になっているかもしれません。そういった新しいものと、既存の川崎の自然や町工場の技術、民間企業等の資源を有効活用しながら、カワサキのミライを想像していました。

30年後の主人公になったような気持ちで

最初にペルソナを設定したことで、参加者の皆さんはその主人公になり切ったような気持ちで「自分ごと」として捉え、川崎について思いを巡らせているようでした。未来を考えることで自然と発言が前向きになっているせいか、笑いが起きたり、自発的な発言があったり、盛り上がっているようでした。学生さんならではの興味深い意見もたくさんあったので、このワークショップを機に、若い世代を巻き込んで一緒に盛り上げていけたら良いなあと思いました。今回出し合ったアイデアは、現実的に需要があるといえる形になっていると思うので、これから川崎でどのアイデアが実現していくのかとても楽しみです。(中村)



このまちで働く自分を想像してみる！日

採用予定者向けフォロー研修

いつもと一味違うワークショップ

今回私がお手伝いしたのは、内定者研修。市では、本採用前に内定者へ向けた事前研修を行っています。研修といっても、座って話を聞くのではなく、割り振られた班ごとでワークに取り組むことが中心です。主役は内定者の皆さん。積極的な議論が求められます。ワークでは、割り振られた区ごとに、区が抱える課題の解決方法に挑みます。ポイントは、行政職や専門職等の垣根を超え、通常業務の範囲では難しい課題に、大胆な解決方法を提案すること。課題は、「禅寺丸柿を世界的な果物にするには？」など、どれも各々の得意分野や川崎市に関する知識を最大限に活用して考えなければならないものばかりです。

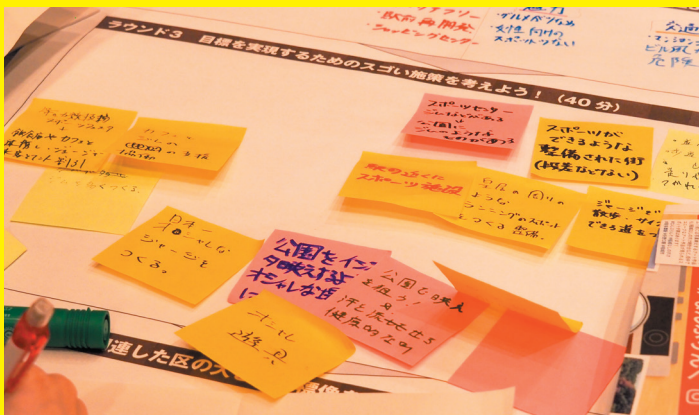
川崎市について本気で考える！

まずは、割り振られたテーブルに着席して顔合わせ。この研修で初めて顔を合わせる人も多く、かなり緊張している様子でした。席についてからも、会話はほとんどなく、静かなスタート。研修の趣旨や進め方の説明が終わって、いよいよワークショップが始まって、遠慮がちに意見を出し合っている様子でした。しかし、私たちや、先輩職員の方々が、サポートしていくうちに、次第に議論も活発になっていきました。全3ラウンドの構成で、まず、区の良い点や課題点を出し合います。席を移動してから、整理した現状をもとに、大きな目標像を描きました。

その後さらにメンバーを入れ替え、目標を実現するための具体的な施策を考えました。「川崎市をつなぐ新たな鉄道路線網をつくる」など、大胆な提案が多かったです。最後は、各班の成果を発表後、良かった班にシールで投票。最もシールを獲得した班には、市から記念品が贈呈されました。どの班も、初対面の人も多くなかでつくった提案とは思えないほどクオリティの高いものになっていて、内定者の皆さんの川崎市への理解が深まったように感じられました。

少しだけ先の自分の未来を考える

緊張しきっていた内定者の皆さんも、徐々に打ち解け、発表では、時折会場全体に笑いが生まれていました。休憩中も積極的にコミュニケーションをとったり、連絡先を交換したりする場面が多く見られたのが印象的で、わずか1日の間に内定者同士の仲がグッと縮まったようでした。将来の同僚達と一緒に、区の抱える課題について活発に議論を交わしたことで、自分が市で働く実感も湧いたことでしょう。参加者の多くが、今はまだ学生。同じ学生である私もそうであるように、少し先の未来で自分がどのように働いているのか、なかなかイメージできない人が多いと思います。今回の事前研修が、内定者の皆さんご自身が働く姿をイメージし、より川崎市へ愛着を持っていただくきっかけになりそうだと感じました。（甲田）



つながることで壁を越える

地域・社会貢献フォーラム 2018 カワサキコネクト

5つの視点から活動を考える

川崎市を中心に、もっと活動の幅を広げたい、何か新たな取り組みを始めたいと思っている人や団体が、出会い、知り、つながる場となるフォーラム「カワサキコネクト」のお手伝いをしました。まず、市内の様々なジャンル、地域で活動している5名のスピーカーから、自身の活動概要や経験、これから自分たちのまちをどうしていきたいかなどの事例紹介がありました。「コミュニティカフェ」「起業・中間支援」「不動産活用・地域ブランディング」「子育て世代の活動」「新しい地域組織」といった各視点から地域課題解決の鍵となるお話で、広い視野から、活動継続や課題解決の可能性を考えました。次に、スピーカーによるトークセッションが行われました。それぞれの活動の重なる部分や、違うからこそ気になることを話す中で、「住民/市民の主体性をいかに育てるか」「つながるコツ」など、経験やアイデアから共通課題や新たなひらめきも生まれているようでした。

それぞれの経験を共有する

その後、活動区域やジャンルを超えたつながりや連携のきっかけをつくるため、スピーカーとその活動に興味を持った参加者を加えて、5つのテーブルに分かれてディスカッションを行いました。語り尽くせなかったスピーカーの経験談を聞いたり、

参加者それぞれの活動の悩みに対して、スピーカーがアドバイスをしていました。また、全体を通して、スピーカーへの“お悩み相談”に陥らず、参加者同士で悩みに共感したり、アドバイスしたりするなど、ひとりひとりがその場の話題を“自分事”として捉えながら話合うことで、とても創発的な場になっているようでした。加えて、互いにスキルを持った知り合いを紹介することで解決している場面もあり、このフォーラムらしい“つながる”様子がとても印象的でした。

わくわくするつながりを得る

事例紹介や交流プログラムの他にも、活動紹介のブースが常設され、防災などにも役立つ炊き出し料理のレシピブックや団体の事務作業を代行するサービスの紹介など、川崎の様々な活動を知る機会にもなっていました。休憩時間や終了後には、各ブースで互いの活動に興味を持って話をしていたり、「コラボすることでよりよくできるのではないかな」といった話もされていました。また、「川崎市市民文化局」のブースでは、未来の川崎のまち並みをイメージしたポスターに、「縁側カフェがあること」や「子どもが安心して外で遊べる」といった参加者からのメッセージが貼られていました。このフォーラムを通し、参加者の皆さんにとって、「将来、こんな川崎にしたい!」というモチベーションも高まる場になったのではないかと思います。(小田)



素敵な川崎を“みんな”でつくりあげよう！

全市シンポジウム「希望のシナリオ」～これからの地域づくりを考える～

100名以上が集まり、本気で話し合う！

川崎市の「これからのコミュニティ施策の基本的考え方（素案）」を知り、これからのコミュニティのあり方について考えるシンポジウム「希望のシナリオ」に参加しました。会場には、川崎市内に在住、在学、在勤、または市内で地域活動をしている高校生以上で、コミュニティに興味がある参加者が90名以上、行政の方を含め、150名以上の方が会場に集結しました。プログラムは、市長のスピーチや施策についての説明を聞いた後に、地区ごとのテーブルで意見を交換し、その後、全体で意見交換をする流れ。私が参加した高津地区のテーブルでは、「本気で川崎市を良くしていきたい」と動きはじめる市民の数を増やすために、どうやって熱意を伝染させていくか、行政の取り組みをどのように市民の活動に役立てていくかなど、施策だけでなく参加者自身の活動と絡めながら、現実的で熱意の感じられる意見交換が行われました。

行政と市民でつくるコミュニティ施策

全体での意見交換では、「今後どうなっていくのか不安」「今までの仕組みはなくなってしまうのか」といった、変化に対する不安の声もありましたが、「理念にはとても共感できる。これからが楽しみ」といった、これからの活動に期待する意見も多く見られました。また、「理念には共感できるが、どう実現

していくのか」という具体性についての疑問も投げかけられました。また、「これから先のワークショップで市民の方々と話し合いながら、実現の方向性を決めていきたい」という回答に対し、「丸投げにならないか心配」という声があがる一方で、「これからのワークショップに備え、しっかりと考えて参加するようになりたい」といった前向きな意見もありました。

双方のあり方を受け入れながらの変化を

今回のシンポジウムでは、これからの市民と行政のあり方を考える場が多く持たれたように思います。福田市長のスピーチでは、「行政も変わっていくので、市民の方々もそれを理解してほしい」という内容がありました。たしかに、どちらかが変わるだけでは、もう片方がその変化を阻害してしまいます。双方のあり方を受け入れることができるように変化していくことこそが、これから求められている姿勢ではないかと感じました。そういった視点で見ると、今回のシンポジウムでは、忌憚なく意見を交換したことで、行政と参加者の距離が縮まったように感じられました。第2部として行われた交流会では、運営側である職員も、行政という属性を持った一人の市民として、参加者と会話を楽しんでいるようでした。そんな光景からも、今後こういったシンポジウムを重ねたら、川崎のミライが素敵に変わっていくのではないかと、私も楽しみになりました。（小田）



●インターンレポーター：東京都市大学 都市生活学部 都市生活学科 4年 小田 史郎

●開催日時：2018年12月9日 ●実施場所：エボックなかはら大会議室（7階） ●参加者：市内在住、在学、在勤、市内で地域活動をしている高校生以上

インターン・ワークショップ・レポート 2018 Student Intern Workshop Report

2019 年 3 月 31 日 発行

株式会社 石塚計画デザイン事務所
<http://www.community-design.jp/>

Intern Reporter

小田史郎・久保夏樹・甲田亮輔・卓映萱・椿崎真菜・中村実穂・堀越まい

Special Thanks

鈴木徳子 (Writer / Editor)

Sapporo office

〒060-0002
札幌市中央区北 2 条西 2 丁目 26 番地 道特会館 4F
Tel:011-251-7573 Fax:011-251-7574

Tokyo office

〒150-0045
東京都渋谷区神泉町 20-24 Bricks 7F
TEL:03-3461-5120 FAX:03-3461-5144